資料渉猟余話

その103

大杉章喜と、山上の神殿 上

嶋　不濁

昨年暮れに泰阜村教育委員会木下忠彦教育長から、泰阜村（温田本店）と天龍村（平岡支店）にあった吉澤写真館の末裔から大量の古い写真が寄贈されたという情報をいただいた。ちょうど天龍村松島の教師で書家で神職だった薊・宮澤秀一を調べていた最中であったので、情報をもたらしてくれた鎌倉貞男氏とともに、さっそく教育委員会にうかがい、寄贈者がわかる範囲で分類してくれた60冊以上のアルバムに目を通すとともに、昭和初期から戦前戦中の泰阜・天龍・阿南など南部地域の学校・祭り・景観など2300枚以上のデータが入ったDVDを頂いてきた。

その中に「祭り・神社関係」に分類された多数の写真があり、なかでも写真に幟旗や半纏に染め抜かれた「宮之本大神宮」の文字は読めるものの、寄贈者も地域を特定できないという十数枚の写真が気になった。山上の急斜面に建つ立派なお社もだが、そこに集う人々の多さとその表情に妙に惹きつけれた。そして、それらの顔の中には、調べていた宮澤秀一の顔もある。これは調べねばなるまい。

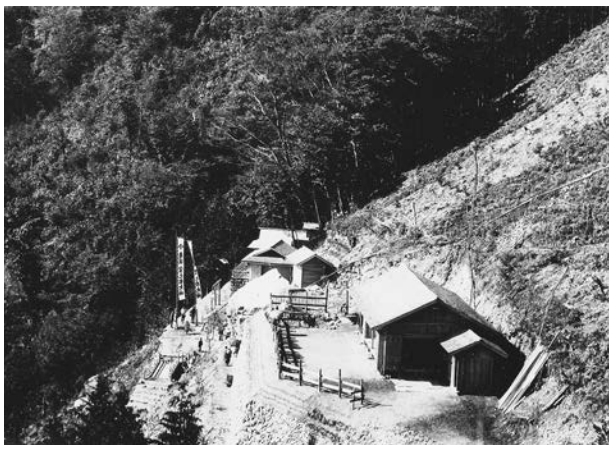
とりあえず泰阜村や天龍村の行政や知人に聞いてみたが、現在、「宮之本大神宮」に該当しそうな神社はないという。そこで泰阜村や天龍村の村史にあたったが、「宮之本大神宮」の名前は見つからない。また天龍村の御家・遠山神職にも聞いてみたり、戦前の神社仏閣の目録を片端から漁ってみたが見つからない。さらに地名（地籍）からの手がかりはないかと今村理則氏にご教示を乞うたところ、氏の踏査によれば、泰阜の左京に「宮ノ本」「宮ノ元」小字があり、そこには諏訪社が鎮座。また平島田にも「宮ノ本」小字があり、泰阜北診療所の東隣にも神社名は不明だが以前にお宮のあった所らしい。さらに天龍村の折立の集会所の東方に「宮ノ本」小字があるが、それらしい神社はないとのご教示を得た。地籍から「宮之本大神宮」をつきとめるのも難しそうだ。

そこで写真をよく見てみると、幟旗や半纏には「宮之本大神宮」の他に、何枚にも写っている恰幅のいい着物姿の丸眼鏡の紳士や、法被に「永命堂醫院」や「池田屋」などの文字が読める。「永命堂医院」の名前を出すと、御家の遠山みよ刀自が「子供の頃、聞き覚えがあり、坂部か中井侍あたりではないか」という。ちょうど、ご自宅の改築で、整理しようと庭先に出してあった先代遠山林景（白雲）宛の書簡類を拝借してくるとともに、視点を変えて、医師の方から当たれないかと、もう一度『下伊那醫業史』を繰り始めた。

中心の紋付姿が宮澤秀一

すると、68ページに開業年時の名簿があり、大正期、松井卓治や今牧祐平、石井虎秋、川島甫らおなじみの名前に並んで「大正三年　大杉章喜（神原）」の名前がある。さらに、日を改めて、鎌倉貞男氏とともに中井侍の羽田野七郎平氏（80歳）を訪ねると、「戦後は中井侍の駅の上に分院があって、その世話をしていた」宮之本大神宮の写真に出てくる恰幅のいい丸眼鏡の紳士は「大杉医師であろう」といい、「その息子元俊さんの奥さんは自分より3つ4つばかり歳上だが、お元気」で、中井侍駅上の旧分院に今も住んでいるという。

その場で電話で連絡して、元俊さんの奥さん宅に行って確かめるというと七郎平氏は「自分も同道する」と言ってくれたが、当日は路面が凍結しており、足元が悪い。私たちも中井侍駅で車をおいて徒歩で七郎平氏宅を訪問したのだった。結局、先方の事情もあり、元俊さんの奥さん宅訪問は他日を期すことにして、鎌倉氏と二人だけで、永命堂医院本院があったという坂部に向かうことにした。



宮之本大神宮の幟旗がはためく真新しい社殿

しかし、この時点で「宮之本大神宮」はどうやら永命堂醫院主人大杉章喜が再建した神社であるらしいことが確信された。そして、数日後、その折、遠山家から拝借した書簡から、なんと大正11年の「大杉章喜」「内科脳脊髄神経病科　永命堂醫院」と書かれた賀状を鎌倉氏が見つけだした。そこには「本院　信州下伊那郡神原村二一六一番地・出張所　三州北設楽郡富山村大字大谷・出張所　信州下伊那郡平岡村高瀬遠州境」と本院と出張所まで記されてたのだ。

腰に手をあてている丸眼鏡が大杉章喜